

「コスモポリス」★★

2013 (平成25) 年4月20日鑑

賞<テアトル梅田>

監督・脚色：デイヴィッド・クローネンバーグ

原作：ドン・デリーロ『コスモポリス』（新潮文庫刊）

エリック・パッカー（28歳の大富豪）／ロバート・パティンソン

ディディ・ファンチャー（年上の愛人、41歳の娼婦）／ジュリエット・ピノシュ

エリーズ・シフリン（エリックの妻）／サラ・ガドン

シャイナー（会社設立時からの部下）／ジェイ・バルチェル

ジェイン・メルマン（タンクトップ姿のシングルマザー）／エミリー・ハンプシャー

ベノ・レヴィン（暗殺者）／ポール・ジアマッティ

ヴィジャ・キンスキー（論理主任の女性）／サマンサ・モートン

アンドレ・ペトレスク（クリームパイを浴びせる男）／マチュー・アマルリック

トーヴァル（運転手兼ボディガード）／ケヴィン・デュランド

2012年・フランス、カナダ映画・110分

配給/ショウゲート

<マネーゲームの愚を告発する問題作、と期待したが>

予告編を何度か観ていると、本作はかなりの問題提起作！白塗りのリムジンをオフィス代わりにしている投資会社を営む28歳の大富豪エリック・パッカー（ロバート・パティンソン）が主人公だが、彼はこのリムジンの中で巨額の富を動かしているらしい。『リンカーン弁護士』（11年）（『シネマルーム29』178頁参照）とは全く違う視点からこのリムジンを考え、またつい先日仮釈放でシャバに戻ってきたホリエモンこと堀江貴文とは全く違う視点からマネーゲームや金融のあり方そしてグローバリゼーションが進んだ資本主義のあり方を考えなければ……。そう思っていたが、イザ始まると……。

<なぜリムジンに乗って散髪に……？>

今日は大統領がニューヨークを訪れる日。また同時に、マネー至上主義による格差の拡大に不満を持つ多くのニューヨーク市民がデモにくり出す日らしい。したがって警備が厳重となり、あちこちの道路が閉鎖され、どこもかしこも渋滞状態に。何もそんな日に、わざわざリムジンに乗って2マイル先の理髪店に行かなくてもいいのでは……？

3月29日に観た『キング・オブ・マンハッタン-危険な賭け-』（12年）も投資会社で大成功した60歳になる男を主人公にしていたが、その破滅に至るストーリー展開(?)は興味深かった。しかし、本作のそんな設定は一体ナニ？後半に至ってエリックもリムジンもかなりボロボロにされて目的の理髪店に到着するが、そもそもエリックがなぜその理髪店で髪を切ることにごだわっているのかが最後までわからないから（きっとその日のエリックの気まぐれだけ）、このストーリー展開に違和感を持つのは当然だ。

<この男はホントに利口なの？それとも……？>

ホリエモンこと堀江貴文は世間からは叩かれたが時代の風雲児であったことはまちがいないし、頭の良さもまちがいない。しかし、本作を観ているとこの程度の会話しかできないエリックがなぜ投資会社で大成功したのかが見えてこないから、その面でも興味が半減してしまう。本作はリムジンの中でのワケのわからない膨大な会話から成り立っているが、そもそもエリックが何の目的意識を持ってそんな会話をしているのかがサッパリわからない。また医師から「あなたの前立腺は非対称です」と言われたことや、美しい妻エリーズ・シフリン（サラ・ガドン）から「あなた、セックスの匂いがするわ」と言われたことが彼の行動や生きざまにどう影響したのかもサッパリわからない。もし、これらが突然ボディガードのトーヴァル（ケヴィン・デュランド）を射殺した理由なら全くナンセンスで、まるで赤子同然の行動といわざるをえない。さらにラストに見る暗殺者ベノ・レヴィン（ポール・ジアマッティ）との追っかけっこ(?)と2人の会話を見ていると、この男はホントに利口なの？それとも……？

<ワケのわからない会話劇の連続にウンザリ！>

エリックはあらゆる未来を予見する能力を持っていたことによって現在の地位を築いたらしいが、今中国の「人民元」の上り下りの読みを一步まちがえれば、たちまちエリックの会社はひっくり返ってしまうらしい。私はそんな金融問題のあり方やマネーゲームの展開に人一倍興味を持っているが、残念ながら本作はそんなテーマについて具体的なストーリー展開は何もない。あるのは、エリックのリムジンに乗り込んでくる関係者たち(?)との会話ばかりだ。

入れ替わり立ち替わりリムジンの中に入ってくるのは、①会社設立時からの部下シャイナー（ジェイ・バルチェル）、②中国の人民元のチャート作りに頭を悩ます若い男、③あまり面白くもないカーセックスを見せてくれる年上の愛人ディディ・ファンチャー（ジュリエット・ピノシュ）、④タンクトップ姿のシングルマザーであるジェイン・メルマン（エミリー・ハンプシャー）、さらに⑤「論理主任」なる肩書きの物憂げな女性ヴィジャ・キンスキー（サマンサ・モートン）等々だ。しかし、これらの会話はいずれも全く噛み合っておらずすべて上滑りとなっているから、全く空虚。さらに新婚の妻エリーズとの朝食、昼食、夕食時(?)の会話もトンチンカンで、聞いているだけで嫌になってくる。その後も本作の会話劇構成は延々と続き、ラストのシークエンスではかつて従業員だったという暗殺者の男とこれまたワケのわからない会話を延々と……。

本作を監督したデイヴィッド・クローネンバーグ監督の『イースタン・プロミス』（07年）は結構面白かった（『シネマルーム19』199頁参照）が、本作は一体どないなってるの……？